

# 正 韵 小 考

——『梁塵秘抄』卷二相伝者の肖像——

小 野 恭 靖

## はじめに

天理図書館蔵『梁塵秘抄』<sup>(1)</sup>卷二は天下の孤本としてきわめて貴重な歌謡資料である。同本末尾には「此一帖不慮相伝 秘本事也正韵（花押）」右一冊以寂蓮手跡徹書記門弟正韵奥書判形有之本書写畢」なる二種の奥書が見える。前者は原本に記された正韵の本奥書で、後者はその転写本すなわち天理図書館本の江戸期の書写奥書である。前者の奥書を記した正韵について『和歌大辞典』では米原正義氏により「正韵みづ」<sup>(2)</sup>『室町期歌人』招月軒。生年未詳——天文四<sup>五</sup>年八月二日以前。能登の人か。正広の門、弟子に圭純がある。大永五<sup>五</sup>年上落。細川六郎植国哀悼の宗傾歌に合点。正広三三回忌歌勸進。晩年七尾招月軒に住む。」ときわめて簡潔に説明される。このうち、「細川六郎植国哀悼の宗傾歌に合点」は後述のように誤りであると思われる。また、前述の『梁塵秘抄』卷二の相伝者であることは、説明中に記されてしかるべき事項と考える。

本稿はこの正韵の事績について新見を加えるとともに、従来の説の再検討を行なうものである。そして、さらにその点を踏まえつつ『梁塵秘抄』卷二の近代に至るまでの流伝についても推測を試みたいと思う。

## 一、正韵の文芸活動

正韵は天理図書館本『梁塵秘抄』卷二の書写奥書に「徹書記門弟」とされるが、『和歌大辞典』所収「正韵」の項にもあるように、実際には正徹の弟子正広の門弟であった。正韵の文芸史上の事績は正徹や正広と比較するときわめて零細であり、稲田利徳氏は「正徹という拔群の歌人のあとを継承した招月庵の歌人達は、遂に師を乗り越えることもできず、漸次、衰退して行った」「招月庵が歌壇で問題にされたのは、正広までであったろう」と評す。これは妥当な評価であると思われるが、正韵の文学事績のいくつかにについてはこれまで忘却されたままになっているので、以下管見に入つたものを、(a)和歌、(b)連歌、(c)典籍の書写、と分類して

述べていくこととする。

(a) 和歌

(1) 招月軒当座歌会

現在確認できる正訥のもっとも早い事績は、永正十五年（一五一八）正月と三月の当座歌会である。これは能登七尾の招月軒において正訥が主催したもので、折しも能登下向中であつた冷泉為広が列し、『為広卿能州下向日記』（冷泉家時雨亭文庫蔵）に記述があるという。『松下集』によれば、正広は為広と深い交流があつたことが知られ、正訥も師の縁で、為広とは旧知の間柄であつたものと考えられる。正訥はこの当時、同種の歌会をしばしば催していたと推測される。

(2) 「植国哀悼歌」

次に大永五年（一五二五）冬の「細河六郎殿御他界時常恒様御詠歌并諸家之送哥」（以下通称の「植国哀悼歌」と略す）がある。これはかつて鶴崎裕雄氏により全文の翻刻がなされた。その一箇所に正訥の名が見えるが、前述のように従来の説に疑問が残る。論述の都合上、やや長文となるが、高国（道永）の哀傷歌とそれを句頭に据えた実隆詠（一部省略）から正訥の名の見える部分までを次に引用する。

道永

おもひにはしなれぬとなとなけきけん うきためにとてなからふる身を

此歌を句頭にて

逍遙院

おきふしもたゝ夢のよの中なれや 心のやみをおもひやりて

は

百年はふるともよしや人の世は 天つ空なる稻妻のかけ

（中略）

をしめつゝおもへは人に常ならぬ 世をさとしける仏ならずや

右以挽哥一首之卅一字置初句首了 綴卑詞述哀憫圓極云

大永五年十月廿九日 桑門逍遙子

おきふしも わかぬ其夜は うつゝとも 夢ともいさや し  
ら雲の（中略） きこえて今は 道まよはしな  
よしさらは見ゆもやあらん一巻を なみたの露にくたさんも  
いさ

只今逍遙院殿よりの御一卷、さて／＼殊勝候や、いよ／＼心中たえかねかたさのまゝ書つゝけ、まことに此なかきさ、みしかさの事さへ一向分別なくて、殊更つかうまつりたる事もはしめにて候うへ、筆をつかへうかへるまゝの事にて候へは、いとゝうつゝなきにて候へとも、これも只物くるはしさのあまりにとおもひゆるされて、被備貴覽候て可給候、次なからかやうの□得尊意度候

月村斎

道永

応 大かたの世の歎きかはいへはえに<sup>(6)</sup> いはてややまん花の

春風

うしときくさらぬ別も今さらに ことはりしるき花の春

風

無むは玉の夢とはしれと無人の 面かけさらぬ花の春風

所のひ音に涙は日数うつれとも かへる道なき郭公かな

所夜たなく橘の袖の□香に 恋しさそふるほとゝきすかな

住千々におもふ秋より外のつらさとや なくさめかねて有

明の月

うつりきて老にかなしき鏡かな おくれし跡のあり明の

月(にはかなるカ)

而にかはるなる風のさはきに山のはの 雲かくれうき有明の月

生しるしらす人のこと草あはれ世と はらふはなみた袖の

しら雪

山ち分野をかり衣たちなれし あとまてしたふ袖のしら

雪

うつすとも筆やはおよふ行年の 十とて八のはなのすか

たを

其九重にすむてふすむは誰袖も おなし色とやしくれける

らん

心 橘つみ阿伽くむ夜半のね覚にも わするゝまなしあたし

よの露

室の戸の苔よりおくの松風に 心きよくも御法をそきく

奉為 清源院殿了然大禪定門御追悼置六喻経文於句頭詠之

大永五霜月仲旬日

招月正韵合爪

本資料の存在に最初に言及した井上宗雄氏は「十一月中旬には

細川六郎哀悼の宗碩の歌に合点したが(尊経閣本<sup>述</sup>、能登に宗碩が下った折に知合ったのだらう」と述べる。この正韵の「合

点」については、前述の『和歌大辞典』も同様であった。また、

稲田利徳氏も「細川六郎他界時高国等詠歌」(尊経閣本)に「大

永五霜月仲旬日、招月正韵合爪」と、合点を施している」とす

る。すなわち、従来の説は「植国哀悼歌」のうち「大かたの……」

以下十四首の「置六喻経文」和歌を宗碩の詠とし、それに正韵が

合点を施したとするわけである。おそらく、和歌十四首の直前の

「月村斉」から宗碩詠、そして末尾の「招月正韵合爪」(傍点稱

者、以下同様)から正韵の合点と考えたものであろう。しかし、

「月村斉」は高国(道永)の「よしさらは……」の返歌に付され

た「只今逍遙院殿よりの御一卷……」なる書状の宛名である。

『雪玉集』によれば、実隆の長歌「おきふしも……」の次に、「よ

しさらは……」の歌が続き、次に「道永」という名が記されてい

る。これは、「植国哀悼歌」においてこの間に位置する書状部分

が「月村斉」すなわち宗碩宛のため、実隆には伝えられず、当然

後代他撰の『雪玉集』にも採られなかったわけである。すなわち、

書状を省略した形式のため、和歌の前でなく後に詠者「道永」の

名が付されていることになる。高国(道永)は宗碩宛書状の中で

息子植国の突然の死を悲しむ心情を切々と述べ、自らの返歌を宗碩を介して実隆に送ってもらうように依頼したのである。それは『雪玉集』に冒頭高国(道永)の「思ひには……」の歌に続けて、「と宗碩所へ申つかはし侍るを、逍遙院開給て」とあること

により明瞭である。その部分は前掲「植国哀悼歌」では単に「此歌を句頭にて 逍遙院」とされる箇所であり、『雪玉集』によって詳しい経緯を知ることが可能なのである。すなわち、実隆と高国の哀傷歌の贈答には、両者とそれぞれ親密な関係を有していた宗碩が間に介在していることになる。以上のように「月村斎」はその名前が記される以前の箇所とかかわりを持ち、次の「大かたの……」以下の「置六喻経文」和歌とは断絶があることが確認される。それでは、続く「置六喻経文」和歌の詠者は誰であろうか。管見ではこれこそ正韵の詠であろうと考えるのである。そもそも、「招月正韵合爪」の「合爪」には合点を施すという意味はなく、書状や文章の末尾に付す「合掌」と同意で用いられてきた。<sup>(11)</sup>後代の例ではあるが『三冊子』の黒冊子に「人のかたへ□」を送るに折紙に認め様、……(中略)……拜机 合爪 など書く。尊卑によるべし」とあるように、人に俳句を送る際に末尾に記す用例がある。既に文明本『節用集』にも見え、室町時代後期には一般に広く行なわれていたものと考えられる。すなわち、この十四首は正韵が句頭に「六喻経文」の「応無所住而生其心」を置いて詠じた歌群と考えてよい。折しも正韵がこれを詠んだ大永五年十一月中旬は、後述のように上洛中であつた。植国が亡くなったのが十月二十三日であつたから、都滞在中の正韵はその情報をいち早く得ることができたはずであり、翌月中旬には高国に十四首を送ることが可能だったのである。正韵は上洛して半年後に当時の政界の大立物とも言ふべき高国のこのような悲劇に遭遇することとなり、自らの歌才によってそれに対応したのである。

以上のように、「植国哀悼歌」所収「置六喻経文」十四首は正韵の詠歌と考えられる。最初の三首は第五句を「花の春風」と春の景とし、第四・五首目の二首は第五句を「郭公(ほととぎす)かな」と夏、第六・七・八首目の三首は同じく第五句を「有(あり)明の月」と秋、第九・十首目の二首は同様に「袖のしら雪」と冬の景にする。以上の十首で四季を構成しようとする作意が指摘できよう。

### (3) 正広三十三回忌一品経和歌

正韵の和歌にかかわる事績としては、さらに大永六年(一五二六)の正広三十三回忌一品経和歌の勧進がある。これは文明十五年(一四八三)五月に正般が勧進した正徹二十五回忌一品経和歌に倣い、また延徳三年(一四九一)五月に正広が正徹の三十三回忌を弔ったことを踏まえたものであろう。実隆の歌日記『再昌草』には次のように見える。

正広卅三回忌、正韵法師勧進 信解品

五〇 まよひ出てへにける年はいそのかみ けふくるさにとみを

七 七 そおとろく

懐旧

五〇 うつめれぬ名をのみとひて草の原 いく春秋の露をかけ

八 八 ん

『再昌草』ではこの直前に配列される歌が大永六年三月晦日と明記されるので、この二首もおそらく同日の詠と思われる。『実隆公記』大永六年三月十六日条には「招月来、先師正広卅三回品経和哥題勸之」とあるので、正韵の依頼を受けてから約二週間後

に詠んだものとわかる。そして、『実隆公記』大永六年四月二日条に「招月来、懷帛遣之、勸一盞」とあるので、この日に正訥に渡したものと思われる。正訥勸進の正広三十三回忌一品経和歌については、『為和集』にも次のように見える。

四月廿五日、人氣品人の勸待る、正広三十三回

六二 聞もらすかたこそなけれ時鳥 村雨過る月のよなく  
正訥勸待也

懷旧

六二 なかれ行涙は袖にはてなしや よになをとめし人のおもかけ

こちらの詞書には「四月廿五日」とあって、実隆よりも約一箇月後に詠じた歌であることが知られる。また、二人の詠歌からは実隆が『法華経』二十八品のうちの第四章「信解品」を、為和が第九章「人氣品」を担当し、ともに二首目を「懷旧」題で詠じていることが判明する。おそらく正訥は師正広ゆかりの都及びその周辺の歌人二十八人に勸進してこの業を成したものと考えられる（あるいは、二十七人に勸進し、自らも一首を詠んだ可能性もあるか）。正訥は後掲の『実隆公記』記事から、大永五年四月十九日に上洛し、翌年五月二十日に能登に帰国している。この十四箇月（大永五年には閏十一月が存在）の間に及ぶ都滞在（但し、途中一時堺に下向）の最大の目的は、正広三十三回忌供養のための一品経和歌の勸進にあったものと思われる。正訥はその業が終功するまでは都に滞在する必要があったのであり、それが成った大永六年五月に能登へ帰国したのであらう。

#### (4) 正訥詠短冊

以上の他、正訥の未紹介和歌資料として管見に入ったものが存在する。それは、伏見宮家旧蔵「短冊手鑑」<sup>(18)</sup>に押された短冊一葉である。歌題は「顯窓」で「あた浪は我袖こえて浜松の根にあらはるゝ浦風そ吹」という詠歌が記され、末尾には「正訥」の署名が付されている。

#### (b) 連歌

正訥の連歌資料としては既に紹介されている大永三年（一二三三）九月二十一日の「何路百韻」（明治大学毛利文庫蔵）があり、脇句をはじめ合計九句が採られている。この百韻は米原正義氏により翻刻がなされている。氏は脇句が正訥であるところから、能登国七尾の招月軒で巻かれたものと推測する。連衆は総勢十八名の多きに及ぶが、特筆すべき人物としては発句以下最多の十三句が採られた宗碩、九句採られた永閑、寿慶などの都で活躍する連歌師がおり、一句の作者に後述の正訥弟子圭純がいる。正訥が都の連歌師たちと伍する九句も採られていることは、やはり招月軒で行なわれたことを裏付けていよう。以下に正訥句を前句とともに掲出しておく。

1 こきませし心や紅葉萩の庭 宗碩

2 とふ人からの屋とく／＼の秋 正訥

...

18 あらしに雲のつるゝ山うは 総英

19 折て行花をや花もしたふらん 正訥

...

32 くすはふねやのいかに露けき 永閑

33 月うすぎとはそは霧にとちられて

...

39 心をもすまてはしらし山の陰

40 岩ふれ水のさわかしきをと

...

55 一筆をはかなくたのむ形みにて

56 かきたえ人はとはむとせす

...

62 かへるといそく天津鴈かね

63 たつ浪も八重の塩ちのあら海に

...

70 ふるき軒はの草はむつまし

71 たち花や袖のむかしをにほふらん

...

78 身をなけくたれおきなふらん

79 露をたふいのち待まのほとにして

...

98 問てまことの影をみせてよ

99 天照す神の宮川水清み

発句の宗碩句からすると、招月軒の庭には萩の花が咲き、木々は紅葉していたものと思われる。正韵は脇句で自らの「屋」とに「とふ人」を迎えることを詠み込む。一方、正韵の付合に注目してみると、第19句目で前句の「雲」から「花」を引き出し、第33句目で前句の「ねぞ」に「とはそ」を、「露」に「霧」を付ける。

第40句目では前句の「す」むに「水」を、第56句目では前句の

「一筆」に「かき」を、さらに第63句目では前句の「かへる」に

「浪」を、第71句目では前句の「ふるき」に「むかし」を、「草」

に「たち花」を付けるといった具合に、きわめて穩当ではあるが、

しかし平板な付句をものす。これは続く第79句目においても、前

句の「身」、「おきな」から「露」、「いのち」を付け、第99句目

も前句の「影」から「天照す神」を出すといった同様の变化の乏

しさを見せつけることとなる。正韵の連歌の力量は、このように

必ずしも高いものとは言えないようである。前述のように、この

百韻に九句採られていることは主催者としての厚い待遇によるも

のと考えられるのである。

#### (c) 典籍の書写

##### (1) 「詠百首和歌（宗仲・重誠）」

立教大学日本文学研究室蔵「詠百首和歌（宗仲・重誠）」は井上宗雄氏の紹介による孤本の中世百首歌で、前の遊紙に「百首和歌 正徹門弟正韵」なる畠山牛庵の極印を持つ極札が貼られている。井上氏は同書が、正韵と同時代の書写にかかると認定する。この百首歌詠者のうち宗仲については井上氏の詳細な考証がある。それによれば、宗仲は宗祇の内弟子的存在であり、『新撰菟玖波集』に一句入集した「宗仲法師」と同一人物であろうという。また、金子金治郎氏『新撰菟玖波集の研究』五五九頁によれば、「宗仲法師」について『新撰菟玖波集作者部類』中書本は「能登国ヨリ出」と説明するという。出身が能登国とすれば、正韵との接点も多いものと思われる。また、宗仲という名の人物は堺の商人

にもおり、実隆は大永四年初夏の『高野山参詣記』の旅の途中、堺の宗仲の寮で休んだことが知られる。これも同一人物とすれば、後述のように正訥も一年余にわたる上洛期間中に堺に下向しており、注意される。

### (2) 武田本『伊勢物語』

武田本『伊勢物語』は能登畠山氏伝来の本とされ、伝称筆者が正訥とも明融とも言われる。米原氏は「正訥が能州と関係のあったことは明瞭であり（後述）、明融もまた後に述べるように畠山氏と関係があったようだから、武田本伊勢物語が畠山氏に所蔵されていたことが事実とすれば、畠山氏と雅交のあった両者、あるいは何れかが畠山氏の伊勢物語に関連していることは当然の帰結といふべきであろう」とされる。明融は正広三十三回忌一品経和歌を詠じた為和の子で、能登下向時に正訥の当座歌会に出席した為広の孫にあたる。

### (3) 『源氏物語』切

伊井春樹氏編『古筆切資料集成』によれば、手鑑『古今墨林』に正訥の極のある『源氏物語』切が押されており注目される。これは河内本系本文による「松風」巻の冒頭に近い部分が記された断簡である。この極札が正確か否かは不明であるが、仮に正訥筆とすれば能登文化圏における『源氏物語』享受の一例として注目されよう。

## 二、『実隆公記』にみる正訥

正訥の名は同時代の代表的公家三条西実隆の日記『実隆公記』

に散見する。管見によれば次の十三箇所に正訥が登場する（一部既述）。

① 能州温井参百足送之、招月卯毛送之、（大永三年九月二十三日条）

② 正訥法師（号）自能州一昨日上洛、可謁之由懇切之間、雖無座敷対面、能登守（畠山義盛）護并温井書状持来之、百足携之、弟子僧圭一打疊十枚持来、（大永五年四月二十一日条）

③ 招正訥招月一盞、寿慶・宗碩・飯川山城・道堅等三献、（大永五年六月九日条）

④ 招月・三嶋等来会、盃酌及昏、（大永五年七月八日条）

⑤ 招月自堺上洛、蠟燭・織香等惠之、暫雑談、堺宿院住吉威徳事語之、（大永五年十月九日条）

⑥ 正訥来会、去廿九日参室町殿（足利義晴）、御対面由語之、（大永五年閏十一月五日条）

⑦ 能州温井右京進太刀一腰黒・百足進上之、招月同道、謁之謝遣之、（大永五年閏十一月二十一日条）

⑧ 尊勝院・招月・花開院等、其外歳暮礼・巻数等在之、（大永五年十二月二十六日条）

⑨ 招月来、密柑一折惠之、（大永六年正月十二日条）

⑩ 招月来、先師正広卅三回品経和哥廻勸之、（大永六年三月十六日条）

⑪ 招月来、懷帛遣之、勸一盞、（大永六年四月二日条）

⑫ 夢庵疊面延十枚招月伝之到来、自愛々々、（大永六年四月十八日条）

⑬(正韵) 招月来、明日可下向能州云々、不調、名香三炷獻之、(大永六年五月十九日条)

まず一見して気付くことは、能登在国の正韵(招月)について記す①を除いた②～⑬の十二箇所の記事が、大永五年四月から翌年五月までの一年余の間に集中していることである。正韵はこの間上洛中であり、実隆邸を直接に訪ねる機会をもっていたことが知られる(末尾掲出の「正韵年譜」参照)。①記事にあるように能登国七尾で招月軒を継承していた正韵は、大永三年九月に都の実隆宛に卯毛を贈っている。これは畠山氏の被官であった温井が参百足を贈った折に便乗したものである。したがって既にこの時点で、正韵と実隆との間には物的交流があったことになる。しかし、②の記事からは、それ以前には二人の間に面識がなかったことが考えられる。これは正韵が都周辺に居住した経験のないことを予想させる。正徹『草根集』にまつたく名の見えない正韵は能登国出身で、正広の能登在国時代に入門した可能性が高いであろう。一方、正韵上洛中の②～⑬記事から、正韵は実隆をほぼ一箇月に一度の割合で定期的に訪ねていることがわかる。このことから都滞在中の正韵が、能登畠山氏の文化的後継者であり、師正広ともかかわりのあった実隆との関係をひとつの中心に位置付けていたことは間違いない。それは一方では、能登に生活圏を持つ正韵が文化を吸収する絶好の機会であり、また守護畠山氏からの要請を担った任務でもあったはずである。なお、⑤に見えるように正韵が十月初旬頃まで堺に赴いていたのは、おそらく堺が師正広の晩年の庵居の地であったことと関係があるろう。

### 三、正韵の死

『再昌草』の天文四年(一五三五)八月条の冒頭には次のような発句三句が見える。

二日、正韵月忌、能州桂純申之

一六 消とまる露の朝かは花もなし

一六 真葛原みし世をかへす風もかな

一六 花薄まねくを月のなこり哉

「桂純」は前掲大永三年(一五二三)九月二十一日「何路百韻」に一句が採られた能登の連歌師で、『実隆公記』②に見える「弟子僧圭」と同一人物であろう。「月忌」と記されているところから、正韵は遅くとも天文四年八月二日以前の某年某月二日に亡くなっていることが知られる。但し、圭純が実隆に句を求める経緯から、また前掲『再昌草』の筆致からも、天文四年七月二日に亡くなり、この日最初の月忌を迎えたとするのがもっとも妥当であろう。実隆は十年前に上洛し、ほとんど毎月のように顔を見せていた正韵のため発句三句を作った。そのうち最初の句の頭に合点が付されているところから、最終的にこの句を圭純に送ったものと考えられる。三句はそれぞれ季節に合致した秋の風物を主体にして、第一句で無常観を、第二句で懐旧の思いをからめている。正韵は前述のように、大永六年三月及び四月に師正広の三十三回忌一品経和歌を勧進している。そして、これも前述のように、正韵は能登の出身と思われ、おそらく正広が文明十二年(一四八〇)八月二十日から翌年三月下旬までと、文明十四年十月から十



八年五月までの二度にわたる長期の能登在国中に、弟子入りしたものであろう。いま、仮に末期の文明十六年頃に二十歳で入門したと想定すると、正広が没した明応二、三年（一四九三、四）頃には三十歳で、大永六年には既に六十三歳ということになる。そして、さらに正訥が天文四年七月二日まで生存したと考えれば、享年は七十歳を越えていたことになる。以上は具体的な部分では仮定に仮定を重ねたものであるが、正訥が長寿であったことだけは確実である。思えば正訥のけって短くはない生涯の足跡で、比較的明確にできる時期は上洛中の大永五年から翌六年にかけての一年余に過ぎない。このような正訥の名が今日ほとんど忘れ去られていることはむしろ当然であると言い得る。しかし、その生涯を飾る一事があったとすれば、それは『梁塵秘抄』巻二を相伝していたことであろう。次に、同書の奥書を検討する。

#### 四、『梁塵秘抄』巻二奥書の検討

『梁塵秘抄』巻二奥書（前掲）についての詳細な検討は従来ほとんど行なわれていないと言つてよい。それは奥書の記述内容が表面的にはきわめて明瞭で、特に理解し難い部分が見当たらないからに他ならない。しかし、管見ではこの中にはいまだ何点かの問題が残されているように思われる。まず、第一に正訥奥書に「此一帖」とある点について、日本古典文学全集本（小学館刊）は注を付し、「全巻を通じて「一帖」といったものか」とする。この「全巻」の意味するところが曖昧であるが、巻二以外の『梁塵秘抄』の他の巻を含めた意味とは到底考えられない。おそらく、

（現存の巻二（天理図書館蔵）が甲乙の二分冊になっているところから、その二冊をまとめて言ったものと思われる。しかし、既に志田延義氏<sup>(29)</sup>が「甲の二枚目には『梁塵秘抄巻第二』」として、前に掲げたやうに、両冊にまたがる目録が記され、乙にはこれがなくすぐ本文になってゐるので、もと巻第二なる一巻であったものを分本としたためにかやうに記されたのである」と指摘するように、巻二の原態は卷子本一巻と考えられ、正訥相伝本においても一冊（帖）本であったものとするのが妥当である。すなわち、「此一帖」は正訥が相伝した巻二が現存本と異なり一冊本の形態であったことを語っているわけである。このことは書写奥書の「右一冊」という表現からも裏付けられる。

次に、「不慮相伝秘本事也」であるが、これは一種の文飾である可能性を考えなければならぬが、それにしても正訥在世当時から珍しく貴重な本とされていたことを想像させる。「相伝」という語からは、しかるべき由緒ある伝来を背景とするように思われる。あるいは、正広からの相伝であったものかもしれない。

書写奥書の「寂蓮手跡」とする点については、周知のように伝寂蓮筆の歌謡資料「田歌切」の存在が著名であり、歌謡の古筆資料を寂蓮の筆と仮託する傾向があったことによるものと思われる。したがって「寂蓮」はあくまでも伝称筆者であり信頼が置けるものではないが、正訥相伝本自体は平安時代末期から鎌倉時代初期という、『梁塵秘抄』成立からあまり時を経ない時代の古い書写によると判断されたわけで、無視できない重要な記述と言えよう。

正韵を「徹書記門弟」とする点については、『顯伝明名録』<sup>(30)</sup> 卷第八「正韻」の項にも「同（徹書記門人）」とある。同書は「正韻」の五人前に「正原」なる人物の項を設けるが、そこには「正広弟子」と説明を付すので、「正韻」については明らかな誤りがあることになる。また、正韵書写の和歌資料「百首和歌（宗仲・重誠）」にも「百首和歌 正徹門弟正韵」との極書があることは既に述べた。正韵を正徹の弟子とするのは江戸期に共通する認識であったと言えよう。

以上、奥書の検討によって室町時代後期の正韵相伝『梁塵秘抄』の姿がより明確になるものと思われる。すなわち、正韵相伝本は卷二のみの冊子本一冊（列帖装か）で、その筆跡は後になり古い時代——平安時代末期から鎌倉時代初期頃——のものと判定されており、当時既に「秘本」として扱われていたのである。正韵はこの貴重な本を「不慮」に「相伝」することとなった。その喜びは何如ばかりであったろうか。以下、正韵相伝本をもとに現存本である天理図書館本『梁塵秘抄』卷二の流伝について推測を試みることにする。

#### 五、現存本『梁塵秘抄』卷二の成立と流伝

正韵は能登国七尾の招月軒でその生涯の大半を送ったものと思われる。したがって、相伝した『梁塵秘抄』卷二も同所にあった可能性が高い。前述のように、現存の天理図書館本は江戸期におけるその転写本である。現存本に押された蔵書印から、越後国頸城郡高田の国学者であった室千寿<sup>(31)</sup>（直輔<sup>(助)</sup>）の所蔵であったところ

まで遡り得る。志田氏<sup>(32)</sup>によれば転写本の成立時期は「時代を遙かに隔てた文化文政期でもあらう」とされる。また、小西甚一氏<sup>(33)</sup>は「江戸時代末期の写らしく、すこぶる新しい写本である」とする。

このような判断の上に立てば、現存本は江戸時代後期から末期の写本ということになり、室千寿本人が正韵相伝本を底本として転写した可能性も残されている。室千寿については従来ほとんど言及がなされたことがない、きわめて伝記資料の乏しい人物である。管見に入った資料に上野国の人、飯塚久敏が文久二年（一八六二）八月に編集した歌集『玉籠集』<sup>(35)</sup>があり、その上巻春の部に千寿の和歌一首が掲載されている。それは「盛花」という歌題による「桜花かゝる盛を一年の日かずにわきて見るよしもがな」という一首である。下巻末尾には入集作者の簡単な覚えが国別一覧として付されるが、千寿は「越後」の三人目に「室直輔」とだけ記される。二人目の大弘（山岸与右衛門）なる人物に「高田」という居所を示す注があり、千寿にもかかっているものと思われる。また、今泉鐸次郎氏『北越名流遺芳』第三集（大正七年、長岡市巢枝堂目黒書店刊）一〇八頁には高田の人「室孝次郎」の伝記が掲載されるが、その一節に「和歌を室直輔に学ぶ。後、近藤芳樹に師事す」とある。室孝次郎は天保十年（一八三九）の生まれであり、おそらく千寿はそれ以前の誕生と考えられる。先掲『玉籠集』の刊行された文久二年（一八六二）には生存していたと思われるので、逆算して寛政年間（一七八九―一八〇一）末頃から文政年間（一八一八―一八三〇）前半頃の生まれと推測される。したがって、現存本『梁塵秘抄』卷二の書写時期はほぼ室千寿生存

期間と重なるであろう。換言すれば江戸時代末期頃、正訥相伝本（もしくは一冊本という形態まで同じその忠実な転写本）が越後高田周辺に伝残していた可能性はきわめて高い。正訥が居住していた能登と越後は地理的に近いことはもちろん、歴史的にも大きなつながりがあった。それは、正訥没後およそ四十年を経た天正五年（一五七七）九月に、越後の上杉謙信が能登七尾城を攻略し、支配下に収めたことによる。これをひとつの契機として正訥相伝本が越後に流出したことも想定できよう。室千寿は何らかの方法でその本を入手し転写する機会を得た可能性がある。正訥相伝本はその後再び姿を消すこととなったが、転写本の方は下総出身の学者村岡良弼（弘化二年（一八四五）～大正六年（一九一七））の手に渡り、そこからさらに明治四十四年（一九一）一、良弼六十七歳）秋に和田英松のもとに移る。和田がこの本を入手した経緯については、従来東京下谷の文行堂で購入したものとされてきたが、佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』によれば、「両国中村樓の古本市」で購入したという<sup>(37)</sup>。この本が後に信綱の竹柏園蔵書となり、現在では天理図書館の蔵書となっているわけである。

以上のような経緯から、『梁塵秘抄』巻二が今日伝存する陰には正訥の存在がきわめて大きいことを認めないわけにはいかないであろう。彼は文芸的業績においては、門流の先達である正徹や正広には及ばなかったが、平安時代末期の今様流行時代の貴重な集成を伝えたという文化遺産の中継者として高く評価されねばならない。

以上、本稿では従来指摘されてきた正訥の事績を再検討並びに整理するとともに、いくつかの新しい事績を加えることができた。そして、彼の最大の業績と目される『梁塵秘抄』巻二相伝にかかわって、その本の姿をより明確にし、現存本の流伝についても推測した。今後さらに、正訥の『梁塵秘抄』巻二相伝の経緯が明らかになることを期待したい。

注(1) 引用は天理図書館善本叢書『古楽書遺珠』所収の写真版による。

(2) 『正徹の研究』一二七頁。

(3) 小栗田淳氏「冷泉為広卿の能登下向」(『しくれてい』第七号(昭和58年12月))による。

(4) 尊経閣文庫蔵。厚様緒紙の仮綴本。本文墨付二十一丁。

(5) 「管領細川高国の哀歌——尊経閣文庫蔵「細川六郎殿御他界時常桓様御詠歌并諸家之送歌」紹介——」(『希聖山学院研究年報』第二十四号(昭和51年12月))。引用も同翻刻による。

(6) 鶴崎氏翻刻の「大かたの世の歎きかはいへはえる」(傍点稿者)を改める。

(7) 『中世歌壇史の研究(室町後期)』二七四頁。

(8) 『正徹の研究』一二七頁。

(9) 引用は私家集大成本による。

(10) このあたりの経緯については鶴崎氏注(5)掲出論文に詳しい。

(11) 『日本国語大辞典』には「手を合わせること。合掌。」とある。

(12) 引用は日本古典文学大系『俳論集』所収『三冊子』による。

(13) 『松下集』に「老僧の廿五年にあたり侍るに、卅三回をとりあげ侍るとて、品経題京より正般藏主下侍る中に」とある。題は法華経二十八品題（正広は「神力品」と「懷旧」題であった。この二題は正韵の勸進で踏襲する。

(14) 引用は私家集大成本による。

(15) 引用は統群書類従完成会本による。

(16) 稲田氏は「再昌草」が、三月晦日の次、四月の事項以前に、この三十三回忌の記事を配置したのは、実隆の資料整理の際の誤り」（『正徹の研究』一五三頁）とするが、依頼を受けた実隆が事前に詠じたものと考えたい。

(17) 引用は私家集大成本による。

(18) 下巻裏43所収。

(19) 『戦国武士と文芸の研究』一五二頁～一五八頁。引用も同翻刻による。但し、新たに句番号を付した。

(20) 『実隆公記』大永三年四月九日条に「宗碩・永閑為請暇来、十五首題書之、同遺能登守護書状遺宗碩了、」と見える。これは宗碩にとって最初の能登下向時の催しである。

(21) 『源氏物語』注釈書の『万水一露』の著者で、母が能登の人であったという。能登と深いかかわりを持ち、後に「能登永閑」（前田綱紀『桑華字苑』）と称される程であった。

なお注（20）参照。

(22) 大永三年六月二十一日能登へ下向（『実隆公記』前日条による）。なお、『実隆公記』永正十七年五月十四日条によれば、能登から実隆に宛てられた「早哥本」の礼千足を寿

(慶) 桂が持参している。

(23) 古典文庫『中世百首歌一』所収。

(24) 『中世歌壇史の研究 室町後期』二八九頁。

(25) 『中世歌壇史の研究 室町後期』二八八～二八九頁、及び平成三年度和歌文学会大会記念講演（平成三年十月五日、於堺市総合福祉会館）。

(26) 『戦国武士と文芸の研究』一三四～一三五頁。

(27) 井上氏も「初対面であつたらしい」（『中世歌壇史の研究 室町後期』二七四頁）とする。

(28) 一例として『松下集』には長享二年（一四八八）八月榮雅主催の七人合作の法衆百首があり、正広と実隆はともに七人のうちに名が見える。

(29) 『日本歌謡圈史』四六一頁。

(30) 引用は日本古典全集本による。

(31) 『名家伝記資料集成』によれば、「むろ かずとし」と読むという。

(32) 『日本歌謡圈史』四六一頁。

(33) 『梁塵秘抄考』一〇頁。

(34) わずかに佐佐木信綱が「鐸屋門なる室千寿」と記す（『梁塵秘抄』〈大正元年、明治書院刊〉五八頁）。

(35) 大阪市立大学附属図書館森文庫蔵。

(36) 丸山季夫氏「静嘉堂文庫蔵書印譜」を参照すると、天理図書館本（転写本）の蔵書印は静嘉堂文庫蔵『北総詩誌』に押された蔵書印と同じであることが確認できる。

(37) 新聞進一氏「古写本発掘(7)梁塵秘抄」（『日本古典文学学会会報』第二十六号〈昭和50年3月〉）による。

〔正訃年譜〕

永正十五年正月  
（五二一〇）

三月

大永三年九月二十一日  
（五三三〇）

九月二十三日

大永五年四月十九日  
（五二五〇）

四月二十一日

六月九日

七月八日

〔この間〕

十月九日

十一月中旬日

十一月二十九日

閏十一月五日

閏十一月二十一日

十二月二十六日

大永六年正月十二日  
（五二六〇）

三月十六日

四月二日

四月十八日

五月十九日

五月二十日

天文四年八月二日以前（某年某月二日・同年七月二日か） 死没  
（五三五〇）

当座歌会主催（於七尾招月軒）

当座歌会主催（於七尾招月軒）

何路百韻主催（於七尾招月軒）

実隆に卯毛を贈る（招月軒より）

上洛

実隆を訪問（都滞在中）

実隆を訪問（都滞在中）

実隆を訪問（都滞在中）

堺滞在

堺より帰洛、実隆を訪問

「植国哀傷歌」を詠ず

室町殿（足利義晴）と対面

実隆を訪問（都滞在中）

実隆を訪問（都滞在中）

実隆に歳暮を贈る（？）（都滞在中）

実隆を訪ね蜜柑を贈る（都滞在中）

正広三十三回忌一品経和歌勸進（都滞在中）

実隆を訪問（都滞在中）

実隆に肖柏の豊面筵十枚を贈る（都滞在中）

実隆を訪問するも会えず（都滞在中）

能登下向

約14箇月の間都に滞在

〔附記〕

貴重な資料の閲覧を御許可下さいました尊経閣文庫、大阪市立大学附属図書館に心より御礼申し上げます。なお、成稿後三村晃功氏『摘題和歌集』の編者考——細川高国の可能性——（『語文（大阪大学）』第五十九輯（平成4年10月））が刊行された。『摘題和歌集』の編者として本稿でも言及した細川高国を想定し得ることを説いており注目される。